

Bolinger の Profile 理論の再分析

——関連性モダリティの視点から——

河 野 武

1. 序

河野 (1994, 1995) によれば, イントネーションは関連性モダリティ R に関わる。とりわけ, イントネーションは, 以下に示すような「R判断」(すなわち I, II, V の場合) および「R意識の判断」(すなわち III, IV, VI の場合) を表す。(なお以下では, U は「発話」を, C は「発話の構成素」を, R は「関連性モダリティ」を表す。)

- (1) I. I say that U (or C) is R.
- II. I ask you whether U (or C) is R.
- III. I say you are aware that U (or C) is R.
- IV. I ask you whether you are aware that U (or C) is R.
- V. (I say that U (or C) is R; and) I ask you whether U (or C) is R.
- VI. (I say you should be aware that U (or C) is R; and) I ask you whether you are aware that U (or C) is R.

また, 上の「R判断」・「R意識の判断」は共通して, <主張>は下降調で, <質問>は上昇調で表出される。

以下では, 「R判断」・「R意識の判断」の観点から Bolinger (1986) の Profile 理論の再分析を試みる。まず第 2 節では, Profiles の個別的な機能について詳細な検討を加える。第 3 節では, Profiles の相互の関係について再考する。さらに第 4 節では, Profile 理論の根底にあるイントネーションの根本的な規定に関わる問題について議論する。

2. Profiles の個別の機能

2.1. Profile A

まず, Bolinger の Profile A の機能からである。この Profile は下降調で実現される音調形であり, 次に示すように, 「主張性」('assertiveness') や「分離性」('separateness') を表示する機能を持つとされる。(以下, Bolinger (1986) から引用する用例については, Profiles の図形的表示は行わず, アクセントを帯びる語は大文字 (かつ他のアクセントと区別が必要な場合にはイタリック体) で示す。また, 引用箇所はページのみを記す。)

- (2) Assertiveness:
But PEOPLE don't BEHAVE that way. (p. 164)
- (3) Separateness related to 'sense':
Her HUSBAND was in an ACCIDENT. (p. 165)
- (4) Separateness related to 'power':
Now TAKE it EASY! (p. 292)

AssertivenessはProfile Aの基本的な機能であり、SeparatenessはProfile Aが反復的に使用された場合などに顕著となる付加的な機能であると考えてよい。Separatenessは(3)のように発話の意味的な細分化を反映させるために用いられ、(4)のように発話に勢いを与えるために用いられる。

さて、このような「主張性」や「分離性」は本論の立場からはどのように説明できるであろうか。「分離性」が発話の提示の仕方に関わるものであることはすぐに気づくはずである。これは、発話を効率的でインパクトの強いものにするための方略である。これは、まぎれもなく、発話態度の一つである。この発話態度は、まさに発話の提示の作法に関わるものであって、命題態度とは区別されるべきものである（河野（1994, 1995）を参照）。命題態度は、例えば主張の場合、次のように表示されるものであった。

- (5) I say that it is *p*. (*p*=proposition)

発話態度が命題態度とは独立に作用することは、(3)や(4)から「分離性」を取り除き、それぞれ一個のProfile Aで発話したとしても、命題態度は不変であることによって納得できよう。この発話態度は、発話（の構成素）が「関連性」を持つことを主張することに関わる。すなわち、本論が立脚する「関連性モダリティ」の一つの様態である先の（I）の場合である。今、Separatenessが発話態度、詳しく言うと「R判断」、と関わることを述べたが、実は、Assertivenessも「R判断」に帰着させるべきものである。イントネーションが表出する「主張性」は、発話の「関連性」の主張なのであって、命題の真偽性の主張ではない。後者は統語論が責任を負うことがらである。発話に関与する「関連性モダリティ」と命題に関与する「真偽性モダリティ」が別々に作用することによって、イントネーションは統語論の呪縛から解放されているのである。このようにして、例えば、命題の真偽性を主張しつつ発話の「関連性」を質問することが可能になるし、逆に命題の真偽性を質問しつつ発話の「関連性」を主張することが可能となる。このことは、以下に検討するBolingerのほかのProfilesによってさらに明らかになるであろう。

2.2. Profile B

次に、Profile Bの機能についてである。Profile Bは、低いピッチから高いピッチへのジャンプを必須の成分とし、尾部に平板、上昇、ないしは緩やかな下降をもつ音調形である。Profile Bが用いられる場合には大別して疑問文の場合と非疑問文の場合とに分けられる。非疑問文の使用例には、以下で取り上げるような六つの機能が認められている。以下、その機能を逐次検討してゆきたい。

まず、Hesitant assertionとInconclusive exclamationの場合である。

(6) Hesitant assertion:

Think we'll have a chance to see them? — We MIGHT. (p. 310)

(7) Inconclusive exclamation:

It's so WONDERFUL. (*ibid.*)

(6)のようなためらいがちな主張や、(7)のような未完結な感嘆文に共通するのは、話者が自分の発話に対して抱いている確信のなさであろう。話者はとりあえず発話を提示したものの、その発話が当の文脈において満足すべき「関連性」を達成できるとは思っておらず、むしろ達成しうる「関連性」の度合いに懐疑的になっている場合である。このような話者の懐疑ないしは発話の暫定性を表出するには、上の(Ⅱ)のように、自分の発話が(十分)「関連性」を持っているか否かの判断を聴者に持ちかけるかたちをとる。

次に、Feedback request 及び Unfinished assertion の場合がある。

(8) Feedback request:

She had on her nicest dress — you know, the ONE with the POLKA dots ON it — and came down looking like a million. (p. 310)

(9) Unfinished assertion:

Like it here? — M-HM. How about you? (*ibid.*)

(8)のようなフィードバックされた提案や、(9)のような未完結な主張は、先の(6)と(7)とは微妙に異なる。ここにおいては、先に同定した「話者の懐疑」ないしは「発話の暫定性」は感じられない。ここでは、むしろ、話者は自分の提示しつつある発話に聴者の注意を引きつけようとしている。話者のコミュニケーション行為に聴者を同調させ、さらに後続する発話に構えをつくらせるのがねらいである。このことを表すには、先の(Ⅳ)のように「R意識の判断」に訴える方法がある。すなわち、発話が「関連性」を持つことを聴者が気づいているかどうかを聴者に尋ねる様式である。話者は聴者がすでに十分「R意識」を持っていると判断される場合にはさらに「R意識」を継続することを期待するであろうし、まだ「R意識」を持っていないと判断される場合には「R意識」を持つことを期待するであろう。

今度は、Dismissal と Implication of 'alert' の場合を検討してみよう。

(10) Dismissal — 'I leave it with you.':

May I take this? — I don't MIND. (*ibid.*)

(11) Implication of 'alert':

It's NONE of your BUSINESS. (*ibid.*)

これらの例においては、(6)と(7)のような「話者の懐疑」は含まれていないが、(8)や(9)のように単に発話に聴者の注意を引きつけているのでもない。ここでは、話者は自分の提示しつつある発話が十分「関連性」を持つことを確信しているのであるが、相手にあえて「R判断」に関して同意を求めているのである。「R判断」を最終的に聴者にゆだねることによって、話者は発話の内容について全面的な責任を負うことを逃れようとしているといえる。(10)のように、一応は相手の申し出に許可を与えているが、また(11)のように、相手に軽い警告を発しているが、その発話が、例えば、どの程度

の拘束力を持つとみなすかは相手の裁量にまかせている、といった態度がここには感じとられる。このように、話者が自分の発話の「関連性」について下している判断に対して相手の同意を求める形態は、次のような否定疑問文の形で言い表すことができる。

(12) Isn't it that U (or C) is R?

(12)は、言うまでもなく、先の(V)の含意をより平明かつ具体的に言語化したものである。(12)には、(V)の括弧でくくった部分が示すように、'that U (or C) is R'という「R判断」に対する真偽判断的コミットメント (epistemic commitment) が含まれている。

次に、Questioning answer と Simplicity and obviousness の場合を検討してみよう。

(13) Questioning answer — 'Why do you ask?':

Are you the fellow who did that? — I AM. (p. 309)

(14) Simplicity and obviousness — 'Why should you ask?':

Did you do this? — I DID INDEED. (*ibid.*)

これらにおいては、話者は発話の持つ「関連性」に聴者が気づくべきであるという判断に立っており、その判断への同意を聴者に求めていると解釈できる。(13)では、ひたすら同意を誘っており、相手の質問意図を引き出すことももくろんでいる。(14)では、同意を誘う動機として、発話内容が答えるまでもなく明白である主旨を伝えている。これらの発話には、相手の発話の示す不十分な「関連性」に対する話者のある種の批判が込められていると感じられる。話者の批判する不十分な「関連性」とは、(13)においては質問意図のあいまいさであり、(14)においては当の質問に対する答えの予測可能性の高さ（すなわちコンテキスト効果の低さ）である。いずれにせよ、これらの例は先の(VI)で定式化した「R意識の判断」の一様式である。「R意識の判断」についての同意を求める形式は、(12)と並行的に次のような否定疑問文で言語化することができる。

(15) Aren't you aware that U (or C) is R?

以上、疑問文以外の Profile B の機能を検討した。そこで、今度は、疑問文における機能について見てみよう。次のような疑問文がその具体例である。

(16) Yes-no question:

Are you PLANNING a TRIP? (p. 310)

(17) Wh question:

So WHAT do you THINK? (*ibid.*)

(18) Complementary question:

His REASON being? (*ibid.*)

(19) Alternative question:

(Stewardess offering refreshment) Have some CANDY or GUM? (*ibid.*)

これらのすべての疑問文も Bolinger にあっては、「宙ぶらりんの状態」('left up in the air') ないし

は未完結性（‘incompleteness’）を表す特殊ケースとして位置づけられる。しかし、本論の立場では、これらの疑問文は、発話の「関連性」についての聴者の意識を尋ねる場合とみしたい。すなわち、先の（Ⅳ）の場合である。話者は、相手の「R意識の判断」を尋ねる形を借りて、相手の注意を発話に向けさせようとしているのである。ここで改めて強調しておきたいのは、「R意識の判断」の質問は命題の真偽性判断とは全く別個のものであることである。これらの疑問文が＜質問＞の発話であることは、真偽性判断が関与する次のような発話行為によって表される。

(20) I ask you whether it is *p*.

（上の定式化は、Wh疑問文の場合には修正が必要となるが、ここでは立ち入らない。）つまり、上の疑問文は(20)を統語的に実現することによって疑問文の発話としての形態が与えられているのであり、もう一方で、イントネーションによって「R意識の判断」への問いかけが表明されているのである。

2.3. Profile C

Profile Cの音調形は、先行する音調的線分からの下降に特徴があり、通常はピッチの下降部分から上昇する。（Bolingerはこの上昇成分は義務的要素ではなく、平板調でも、ゆるやかな下降調でもよいとしているが、ここでは上昇を伴う場合に観察を限定しておく。）

まず、Bolingerの挙げているProfile Cの第一の機能は、次のようなReassuranceの場合である。

(21) Reassurance:
DON'T CRY. (p. 178)

（なお、Bolingerは、上の例では、DON'Tの部分はProfile B（＝高平板調）を担っているものとしているが、本論の扱いでは下降調の変種とみなしたい。）(21)のような勇気づけの場合とは、「泣くんじゃないよ」という慰めの発話は当の文脈において「関連性」が高いものであることを聴者に提示し、聴者の同意を求めている場合であると解釈できる。つまり、話者は「私の慰めの言は当を得たものだと思いますか。」と相手に問いかけているのだ、とみなすわけである。こうすると、(21)は話者の「R判断」についての同意を求める先の（Ⅴ）のケースに収まることになる。このことは、翻って、この場合と先に見たProfile BのDismissal（＝(10)）及びImplication of ‘alert’（＝(11)）の場合との相通性を浮き彫りにさせる。確かに、これらの表す心的態度は同質的である。(21)も、(10)や(11)と同様、「R判断」を最終的に聴者にゆだねることによって、話者は発話の内容について全面的な責任を負うことを回避しようとしている。ただ異なるのは、(21)では相手への同情が感じられるのに対して、(10)や(11)ではむしろ軽い批判が感じられる点であろう。前者は相手の利益につながる発話であるのに対して、後者は話者や一般的な人々への利益と引き替えに相手は何らかの不利益を被る場合であろう。いずれにせよ、基本的には同一の心的態度から派生していることは疑いの余地がない。

次に、Profile Cが何らかの形ですでになじみのある情報を表す場合を検討してみたい。

(22) Familiarity:
Why didn't she like the book? — There was a SCARY place in it. (p. 179)

上のような例においては、新情報を新情報として提示するのではなく、すでに何らかの形で知っている、ないしは知りうると予測される情報として提示する場合である。②②には、'I thought you knew, so why do you ask?' といった問いかけが含まれているとされる。話者は、聴者が尋ねるまでもなく明らかな（ないしは明らかなはずの）ことをわざわざ尋ねる意図を計りかねている、もしくは計りかねているポーズを取っている状況である。これは、先に見た①③の Questioning answer ないしは①④の Simplicity and obviousness を弊弊とさせるものである。相手の質問がこの場でやや確性を欠くことに対する軽い批判が込められている点でも共通である。

次に、Profile C が疑問文と関わる場合を見てみたい。これらには、「勇気づけ」や「抑制」が表される場合が含まれる。

②③ Reassurance:

ISN'T it *NICE*? (p. 178)

WHAT'S *THAT*? (*ibid.*)

②④ Politely repressed reprimand:

Are YOU trying to *THREATEN* me? (p. 179)

これらについては、先の②①と同様の説明を与えることができるが、この種の疑問文に関して O'Connor & Arnold (1973: 63-64) は興味深い観察を提出している。彼らによれば、Profile C に相当する音調形を帯びる Yes-no 疑問文はこの疑問文のもっとも一般的な音調形であり、「純粋な関心」('genuine interest') を表す一方、対応する Wh 疑問文は「聴者との絆の確立」('to establish a bond with the listener') を意図したものであり、情報を受け取ることへの関心のみならず聴者自身への関心をも表し、さらにしばしば親しさも表すという。本論の立場では、これらの発話態度の違いは「R意識」の作用するレベルの違いに帰されるべきものと考ええる。発話の存在そのものに注意を向けることも、低次ではあるが基本的な「R意識」の作用の仕方である。また、発話の持つ様々な「関連性」、とりわけ話者の発話意図、に注意を注ぐことは、さらに高次の「R意識」のありようである。こうして、O'Connor & Arnold (1973) の言う「純粋な関心」とは今述べた低次の「R意識」の場合に該当し、「聴者との絆の確立」は高次の「R意識」の場合に相当するものと解釈できる。Yes-no 疑問文は聴者の予期しない場面で発せられることが多いから、イントネーションの面からは発話そのものに注意を払わせることは有効であろう。一方、Wh 疑問文は話者と聴者との間に前提（例えば上の②③の場合には 'That's something.' のようなもの）が確立していることが必要条件となるから、発話そのものへの「R意識」はすでに得られているものとして、「R意識」はさらに高次の内容に振り向けられるのであろう。ちなみに、Wh 疑問文が下降調（すなわち Profile A）をとることが多いのは、Yes-no 疑問文ほど発話そのものへの注意を喚起する必要性がないことによるものと思われる。Wh 疑問文においては、高次の「R意識」に聴者を誘うのでなければ、話者は単に発話が「関連性」を持つことを主張するだけで十分なのである。

次に、Profile C が疑問文と関わるもう一つの場合を見てみたい。相手に発話を反復することを求める次のような問いの形である。

②⑤ Reclamatory question:

They GOT there *WHEN*? (p. 318)

(GOTには高平板調のProfile Bが置かれているが、ここでは立ち入らない。)この種の疑問文は、相手の発話を正しく受け取ったかどうかを確認するために用いられるものであり、話者が不確かだと感じている発話の部分に質問の焦点が当てられている。話者は相手の発話をなぞりつつ、話者にとっての情報の欠落部分を相手に気づかせるのがこの種の発話のねらいである。話者にとっての不確定な項目に相手の注意を向けさせることこそ、第一義的な役割といえる。ここでのProfile Cの働きが「R意識の判断」への問いかけ、すなわち本論の(N)の場合、にあることは容易に理解できるであろう。この種のWh疑問文と違って、発話そのものに特別な注意を促す必要がない場合には、音調形はProfile Aをとる。これは質問を切り出す際に用いられるごく一般的なWh疑問文の場合にあたる。このケースでは、話者は当の質問が額面どおりの「関連性」を持つことを保証することで十分である。すなわち、話者は、(I)によって「R判断」を主張する道を選ぶ。

2.4. Profile AC

今度は、Profile ACの機能について吟味してみたい。この音調形は、Profile AとProfile Cの複合体であり、その機能も両者の相互交渉の結果とみなされる。Profile Aは「主張性」('assertiveness')の次元で作用し、Profile Cは「未完結性」の次元で作用する。BolingerはProfile ACの機能を五つ挙げているが、本論の観点からは二つのグループにまとめて考察することができる。第一のグループは次のようなものを含む。

- (26) Salutations and farewell:
HELLO there! (p. 181)
GOODBYE now! (*ibid.*)
- (27) Theme particularization:
Your *BROTHER* broke his LEG. (p. 182)
- (28) Emphasis:
Well *GOOD* for YOU! (p. 183)
- (29) Admonition:
DON'T do *THAT*! (*ibid.*)

これらの語用論的機能は、一見多岐に及ぶように見えるが、実は単純な要素に還元することができる。まず、これらはProfile Aの成分(すなわち下降調)を含むものであるから、話者は発話(の構成素)が当の文脈において「関連性」を持つことを主張しているとみなしうる。すなわち、本論の枠組みで言えば、(I)のケースである。上の例は、さらに残りの半分にProfile Cの要素を持つが、これはすべて聴者が問題の発話の持つ「関連性」に気づいているか否かを尋ねているのだと考えうる。(26)のような儀礼的な発話においては、発話の内容は空虚なものであるが、ともかくもそのような挨拶行為を行っていることを相手に認定してもらうことが眼目である。それは、発話に相手の注意を向けさせるというもっとも素朴な行為によって果たされる。儀礼的な発話においては単に相手の注意を引きつけるだけでよいが、発話内容に比重がかかる(29)のような場合には発話の「関連性」についてのより実質的かつ積極的な判断が求められる。例えば、この発話が相手を諭すことを意図したものであることも、「R意識」の一部として要求されるであろう。(26)と(29)の「R意識の判断」の対象がこれらの発話全体に及ぶのに対して、(27)及び(28)の判断対象は局所的である。(27)では、主題であるYour BROTHERに「R意識」を向けることが促されている。言うまでもなく、主題は

題述を提示するための前段的情報を成すものであり、主題の担う情報価もさることながら、題述との連結性に重要性が置かれている（河野（1992, 1993）を参照）。従って、高い情報価は（Ⅰ）の機能を持つ下降調によって、連結性への意識の誘導は（Ⅳ）の機能を持つ上昇調によって表出される。主題のように明確な発話の構成素を成さなくても、発話の分節素は自由に聴者の注意を集めることができる。(28)は、強調された要素に注意を注ぐことを促す発話である。発話は強調のために小刻みに分割され、堆積されるが、話者は個々の要素が「関連性」を持つことを主張する一方で、「関連性意識」に訴えることによって、要素が他の要素との連結性を示すことに聴者の注意を向けている。ここで注意しておきたいのは、「強調」を示す役割の中心は「関連性」の主張成分、すなわち Profile A によって表される部分であることである。Profile C が関わるのは、この主張成分を他の要素と対応づける役割においてである。

Profile AC について考慮すべき機能がもう一つある。次に示すような Selective contrast を表す場合である。

(30) Selective contrast:

What would you like for breakfast? — I like WAFFLES. (pp. 181-82)

この発話は Ladd (1980: 153) によって 'focus within a given set' と呼ばれたもので、(答えとして) 予測される組の中から特定の項目が選択され、他の項目と対比される場合である。このような「選択的対比」には、まさに Profile A の成分と Profile C の成分の両方が必須であって、どちらかを欠いては自然な発話とはならない。ここでの Profile A の役割は、当然のことながら、発話が「関連性」を持つことの話者の主張の表示である。話者は、朝食にワッフルを食べたいと思っている以上、それを相手がどう思おうと、そう言わざるを得ない。しかし、同時に、朝食にワッフルを選ぶのは相手の予測を裏切ることになりそうだという判断を持っていれば、話者は「私の発話は当を得ていますか。」と問いかけるであろう。Ladd の言う 'Does that count as an answer?' の含みである。(Ward & Hirschberg (1985) の指摘する「話者の不確かさ」('speaker uncertainty') なども同種の内容を言い当てている。) 話者は自分の発話内容について妥協するつもりは毛頭ないが、相手の予測を裏切る発話、すなわち処理の負担が重くなり「関連性」が低い発話を行わざるを得ないことを断っているのである。それは相手に「関連性判断」を問いかけてみせることによって果たされている。この場合に問題とされている「関連性」は、言わば「ぎりぎりの関連性」ではなく、「十分な関連性」であろう。すなわち、あえて言えば、次の(31)ではなく、(32)のようなものであろう。

(31) I ask you whether U (or C) is R (*at all*).

(32) I ask you whether U (or C) is R (*enough*).

しかし、もちろん、*at all* や *enough* のような修飾語は説明の便宜のためであって、定式化にとって本質的なものではない。なぜならば、「関連性」R は、定義上「多かれ少なかれ」の性質を持っているからである。いずれにせよ、話者は、一方で「ワッフルが食べたい。」という発話は（Ⅰ）によって「関連性」があると主張しており、その意味で言うべきことを十分言っているが、もう一方で、「十分な関連性」の観点からはいささか相手との協議の必要性を感じており、（Ⅱ）（あるいはもっと特定の(32)）によって相手に判断をゆだねる方略を採っている。

今検討中の事例は、「R判断」の主張と質問とを合わせ持つ点で、先の(10)及び(11)で見た「R判断」

に関して同意を求める場合、すなわち先の (V), に当たるのではないかと思われるかもしれない。しかし、結論的に言えば、今の事例は「R判断」の主張と質問が対等に合接されており、(V) のように主張成分より質問成分の方が前面に押し出されてはいない。つまり、問題の発話の話者は、発話の「関連性」について相手の同意をとりつけうるとは読んでいないのである。それどころか、相手が「関連性」について異を唱えるかもしれないことを十分予測しているのである。こうして、「R判断」は単純に質問の対象となる。

2.5. Profile CA 及び Profile C + Profile A

Bolinger は Profile CA を Profile A の強意形とみなしている。次のような例がそれである。

(33) GOOD! (=god) (p. 181)

また、Profile C + Profile A は 'tension-relaxation' といった一般的心理効果を果たすものであり、その意味は 'holding back, but concern in spite of it' (p. 302) であると規定している。この複合的 Profile の機能は、Sag & Liberman (1975) が着目したような 'surprise/redundancy' に限定されるものではないとみなしている。特に、Profile C は、丁寧さなどの社会的に要請されるなんらかの「抑制」('restraint') を表していると想定している。この複合的 Profile の全体的な機能は、以下に示すように、実に広範である。

(34) Vehemence:

The PAIN is TERRIBLE. (p. 300)

(35) Insistence:

Well, WHAT do you SAY? (*ibid.*)

(36) Defiance:

DON'T you DARE! (*ibid.*)

(37) Enthusiasm:

This is my friend Jesse Maynard. — How DO you DO! I've been wanting to meet you for ages. (*ibid.*)

(38) Mock sympathy:

You're BREAKING my HEART. (p. 301)

(39) Deep concern:

I'm REALLY WORRIED. (*ibid.*)

確かに、Profile C + Profile A の用途は多岐に及んでいるが、Profile CA とも通じ合う独特の誇張的発話態度を見逃すことはできない。話者は、発話を緊密に結びついた統一体としてドラマティックに相手につきつけているようである。話者は、大げさな身ぶりで発話を演じているかの感がある。発話の前半は Profile C によってまとめられ、後続の発話と連携され、Profile A によってそれまでに累積された情報内容が堰を切ったように放出されるのである。本論の枠組みに即して言えば、発話の前半は (V) によって聴者の「R意識」を喚起し、後半は (I) によって話者の「R判断」の主張が効果的に表明されるものと解釈できる。このように、発話全体の重みを話者の「R判断」の主張に集中させる発話には、発話の持つ「関連性」についての話者の確信が読みとれる。話者は、

「これほど『関連性』の高い発話は他にはないはずだ」と思っている。話者は、様々な観点から、問題の発話が目下の状況下ではもっとも高いコンテキスト効果を生み出すものであることを確信しているのである。

Profile C + Profile A と Profile CA には本質的な違いは何もない。異なるのは Profile C が関わる範囲である。前者は、その範囲はかなり広い。③4-③9 では、Profile C が関わるのは、正確に言うところ最初の語彙項目から次のアクセントを帯びる語彙項目の直前までである。一方、Profile CA における Profile C の範囲は局限されている。例えば、すでに検討した③3 においては、そもそもこの発話は一語文であるから一語にすべての音調形が乗せられなければならないわけであるが、この唯一の項目に聴者の注意を引き込み、わずかなタイミングの差で続く話者の主張に繋いでいる。このように、Profile C の及ぶ範囲がせばまるにつれて、特定の項目に強調が収束してゆく様をはっきり認識できるはずである。

「関連性」についての話者の絶対的な自信の表明は、次のような修辞疑問文にも顕著である。

(40) Rhetorical question:

- a. I could tell the story, sure, but who would EVER BELIEVE it? (p. 302)
- b. Are you SURE of your FACTS? (p. 303)

Wh 疑問文・Yes-no 疑問文を問わず、これらの修辞疑問文は発話の全幅を使って話者の「関連性」の主張を印象づけようとしている。話者は、問うまでもなく自明な問いをあえてこの場に持ち出すことによって、「この問いを発してみるほど当を得た発話行為は他には考えられないはずだ。」と「見え」を切っているのである。話者は、当然のことと想定する答え、すなわち(40a)では 'No one would believe it.', (40b)では 'You are not sure of your facts.', を相手に強引に押しつけており、他の答えの可能性を閉め出しているように見える。このような話者の「R判断」の強い主張は、発話の前半の Profile C がもたらす緊張感の昂揚に助けられて十分効果的なものとなっている。

3. Profiles の相互の関係

前節では、Bolinger の Profiles の個別的な機能を「R判断」・「R意識の判断」の観点から再分析を試みた。本節では、Profiles が相互にどのように規定されているかに注目し、その枠組みが抱える問題点を克服すべく代案を提出してみたい。

3.1. Profile A と Profile B

Profile A は、比較的高いピッチからの下降によって特徴づけられる音調形であり、その一般的な機能は「主張性」('assertiveness'), 「分離性」('separateness'), 「完結性」('completeness') にあった。一方、Profile B は、先行する線分からの上方向へのジャンプを不可欠の成分とし、尾部は平板、上昇、ないしは緩やかな下降のいずれかを許す音調形である。またその包括的な機能は、「連結性」('connectedness'), 「未完結性」('incompleteness'), 「予測可能性」('predictableness') に置かれていた。これらの Profiles の相互の関わりを調べるに当たってまず検討しておきたいのは、Profile A に帰せられる、重要な情報を表示するための「分離性」と Profile B の「予測可能性」との対応である。話者によって何らかの重要性を帯びるとみなされた項目は、Profile A によって他から独立した項目として提示される。一方、何らかの形で予測可能な情報と判断された項目は、

Profile Bによってより重要な項目と結びつけられる。予測可能な情報の典型的なものとしては、反復的な情報やステレオタイプ化した情報が含まれる。次の例がそれである。

- (41) If anybody asks where you've been, what'll I say? — If *ANYBODY* asks where I've *BEEN*, just say I've been *AWAY*. (p. 279)
(42) And *THAT* was *THAT*. (p. 167)

しかし、この種の情報のボーダーライン上には、予測可能と言うよりは一段重要度が低い (Bolingerに言わせれば 'less new and less contrastive' (p. 172) な) 情報がのってくる。次の例を参照。

- (43) I didn't make it for JOHN, I *MADE* it for YOU. (p. 172)

上の文で *MADE it for* が Profile B を帯びるのは、先行文脈からある程度予測可能であるためというよりは、それ自体十分重要なのであるが後続要素の *YOU* よりは重要度が落ちるためであると考えられる。予測可能性からさらに遠のく事例には次のようなものがある。

- (44) You're a *ROTTEN* LIAR. (p. 169)
(45) I'm just *KILLING* TIME. (p. 174)

Bolingerによれば、(44)の *ROTTEN* は「程度の増強」('enhancement') を表し、(45)の *KILLING* は自明な情報を表すとしているが、いずれも相対的に重要度の低い情報とみなす方がより適切である。

Profile A は独立した重要度の高い情報を表し、Profile B はより重要度の高い項目の存在を前提にした、相対的に重要度の低い、しかし一定のレベル以上の重要度を持つ情報を表すものとする、両者とも程度の差こそあれ、発話にインパクトを与える効果、すなわち「主張性」に寄与していることがわかる。両者には、むしろ共通点が見いだせるのである。両者は基底では別個の音調形を成すのではなく、問題の Profile B は Profile A の環境による変種であると考えることができる。この種の Profile B は、潜在的には Profile A を担いうる項目が相対的な情報価の低さゆえに単独の Profile を形成できず、後続の Profile の付加的・従属的音調成分となった場合であるとみなせる。つまり、問題の Profile B を後続の Profile の (O'Connor & Arnold 流の) Head とみなすのである。

(本稿では Head の種類は厳しく限定しており、このほかには Profile B のもたらす高平板調と Profile C のもたらす低平板調の二種類のみを認める。これらについては後で述べる。) Profile A の音調形を高下降調、すなわち HL (=High Low) とすると、高平板調 H は次のような音調削除規則によって単刀直入に生成される。

- (46) *Tone Deletion*:
 $L \rightarrow \emptyset / H_T$ (where T is any arbitrary tone)

このようにして、例えば上の(45)では、基底では *KILLING* にも *TIME* にも HL が付与されるが、*KILLING* に与えられた HL は後続の音調形が存在を条件にして H に変えられる。

Profile B の高平板調を後続の Profile の Head と規定することで、Profile B のもつ「連結性」の機能はきわめて自然に導き出される。なぜならば、Head は原理的に後続の Profile に依存せざるを得

ないからである。

3.2. Profile B と Profile C

Profile B はやや両義的な性格を持ち、Profile C との共通点も多い。例えば、「未完結性」や「予測可能性」などがこれに入る。一方、Profile B が「鼓舞」ないしは「興奮」('keyed-upness')を表出し、「主張性」の次元で Profile A に接近する場合があるのとは対照的に、Profile C は Profile A とは全く逆に、発話にさまざまなニュアンスの「抑制」の気分を添える。

Profile B と Profile C とは音調形においても類似点と相違点とを合わせ持つ。類似点としては、両者とも（ピッチの差はさておき）上昇調ないしは平板調で実現されることが挙げられる。（もっとも、ともに緩やかな下降調で現れることもある。）しかし、両者には明確な相違点がある。Profile B は先行する低いピッチの音節からの上方向へのジャンプが必須の要素であるのに対して、Profile C は先行する高いピッチの音節からの下降が示差的である。（ただし、Profile B の先行する低い音節の存在は任意であるとされる。）Bolinger の枠組みでは問題の二つの Profiles の音調形を体系的に対応づけようとする努力はなされていないが、そのような可能性を模索することは意義深いことと思われる。

本論では、Profile B と Profile C はともに上昇調の変種であると考えたい。これらは、この点で下降調の Profile A と対立する。これらの Profiles は基底では LH を持つとする。さらに、Profile B は高いピッチの成分に比重がかかっており、Profile C は低い成分が支配的であるから、それぞれを音声的には LH* 及び L*H（ただし * 印は支配的な音調成分を表す）として区別したい。さらに詳しく言えば、非支配的な音調成分は支配的な音調成分と組合わさって上昇調を生み出しさえすればよいから、LH* の L も L*H の H も中位の高さでよい。つまり、音声的に Profile B は高上昇調、Profile C は低上昇調と規定できる。以上は問題の二音調形が上昇調で実現される場合であるが、次に平板調で実現される場合を検討してみる。結論を先取りして言えば、これは先に述べた (40) と同様の音調削除規則による。(40) では音調を支配的成分・非支配的成分に分けて考えなかったが、改めて Profile A の音調形は H*L であるとしよう。このような規定のもとでは、(40) は非支配的音調成分の削除とみなしうる。実は、Profile B 及び Profile C の平板化はこのプロセスに由来するものである。両音調形からそれぞれ非支配的音調成分である L ないしは H が削除されて、Profile B は高平板調に、Profile C は低平板調に変えられる。(40) の一般化した式型は次のようなものとなる。

(47) *Tone Deletion* (Final Version):

$T' \rightarrow \emptyset / X_Y T$ (where T' is a non-dominant tone; T is any arbitrary tone)

上の (47) によってもたらされる平板調は後続の Profile の Head となるが、このような Head の存在は Bolinger のモデルとは異なった予測をする。その第一点は音調の中和である。(47) で Profile A の H*L が H* となり（これを Profile B の一つの音声形とみておいたのであるが³）、Profile B の LH* が H* となるとすると、結果として音調が中和したことになる。両者はともに、独立した Profile としての資格を失い、後続の Profile にいわば接辞的に付加されることによって、「連結性」の機能を帯びるにいたったのである。（もっとも、Profile B は上昇調のゆえにもともと「連結性」を表すから、Head になってもこの機能は保持されていると言うべきである。）

Head を容認する本論と Bolinger のモデルとの乖離の第二点は、Profile C に先行する低平板調の存在を認定するか否かである。Bolinger の Profile C は、先行する高いピッチからの下降がもっとも

重要な特徴であり、先行する高い音節の存在は必須であって、したがってなにがしかの強勢を伴う低平板調が先行することも定義上排除されている。Bolinger は、次のような本来高いピッチを帯びるはずの項目が削除された場合のみ、跳躍台を欠く低上昇調の Profile C を認めている。

(48) (Are you) ALWAYS so careful? (p. 361)

しかし、事実としては、この種の低上昇調は削除を伴わない場合にも広く観察されるのであって、むしろこのような限定こそ不自然というべきであろう。Profile B では高上昇調に先立つ低いピッチを帯びる音節の存在は任意であったことを考え合わせると、不自然さはうなずけよう。実際、O'Connor & Arnold (1973) や Halliday (1967) や Pike (1945) を始めとして、跳躍台のない低上昇調を認定する学者は多い。さらに、Head ないしは Pretonic などの非核音調を設定する枠組みでは、低平板調は低上昇調の非核音調として広く認められている。本論では、すでに明らかなように、低平板調は Profile C から(48)を経て派生される音調とみなす。この音調は、Head として後続の(核)音調と自由に組み合わせられる。それ以上の特別な制限は必要ないと思われる。

4. メタファー的存在物としての音調形

Bolinger の Profile モデルの根底にあるのは、次のような考えである。

(49) ... intonation ... has its symbolizing power thanks to a primitive drive mechanism that raises pitch as tension rises and lowers it as tension falls. (Bolinger (1986: 194))

つまり、イントネーションは話者の内的感情を兆候としてじかに提示する表象作用を担うとする見方である。こうして、イントネーションは、顔やその他の身体による身ぶりと同列に、音声による一種の身ぶりとして定位づけられる。例えば、Profile A は視線を落とすしぐさと並行的に「完結性」を表し、Profile B は眉を上げるしぐさと同様に「未完結性」を表し、さらに Profile C は頭を下げるしぐさとともに「抑制」を表すとされる。このようなイントネーションの表象作用の興味深い点は、それぞれの音調の形はその意味と比喩的に対応づけられることである。身ぶりは視覚的な次元における比喩媒体となる。このような音調形と身ぶりとの並行性は、明らかに、共感的な比喩という認知プロセスのもたらしたものである。音調形が一般的な認知プロセスを反映して、ピッチ曲線による比喩として機能していることは、おそらく間違いないことであろう。しかし、そのように断定できるほど豊富な認知科学の証拠はまだ得られていないのが実状であろう。現時点でわれわれがすべきことは、そして達成が見込めそうなことは、言語ないしは言語運用という固有領域におけるイントネーションの固有の役割を明らかにすることである。

イントネーションのより限定的な語用論モデルを確立することは急務である。本論の枠組みは、それを目指すものであった。本論では、イントネーションは「R判断」または「R意識の判断」を、そしてそれのみを表すとしている。「R判断」とは、今提示しつつある発話が「関連性」を持つか否かについての話者の〈主張〉ないしは聴者への〈質問〉を伴うものであった。一方、「R意識の判断」は、当の発話が「関連性」を持つことを聴者が意識しているか否かについての話者の〈主張〉ないしは聴者への〈質問〉の形を取るものであった。また、抑揚形は基本的に下降調と上昇調の二つを設定し、「R判断」も「R意識の判断」も共通して、話者の〈主張〉は下降調で、聴者への

く質問>は上昇調で表された。さらに、上昇調は高上昇調と低上昇調の変異形を持つことを認めた。これらの上昇調には、上昇調の持つ基本的な機能に加えて、高上昇調には「解放性」の特徴が、低上昇調には「抑制性」の特徴が付与されるものとみなしうる。

Sperber & Wilson (1986) が言うように、コミュニケーションが Presumption of Optimal Relevance に従って最適の「関連性」を達成しようとするものであり、また Principle of Relevance によってそのようなねらいを伝達行為を通して伝達するものであるとすると、本論の仮定する「R判断」ないしは「R意識の判断」はまさにコミュニケーションの中核に位置づけられる概念であるといえる。「R判断」・「R意識の判断」の様々な様式を通して、「関連性」の高い項目をそうでない項目から際だたせ、発話の適切性を尋ねたり確認したりして「関連性」を維持し、さらに発話に注意を向けさせることによって「関連性の意識」を高めかつ後続の発話への態勢をつくらせる、といったイントネーションの持つ様々な役割をからめとる仕組みである。発話の総体的な「関連性」を大きく左右するのはどちらかと言えば命題内容に置かれるが、イントネーションは話者及び聴者の発話への関わり方の側面から「関連性」に繊細に寄与するのである。

イントネーションの役割を新情報・旧情報といった聴者の認知環境における知識の状態を区別することに置く見方は、明らかに一面的にすぎる。例えば、Brazil *et al.* (1980) は Proclaiming/Referring (前者は下降調、後者は下降上昇調) の名のもとに新情報と共有知識とを表示し分けた。同様に、Gussenhoven (1983) は Addition/Selection/Testing (順に下降調、下降上昇調、上昇調) の範疇で、「背景 (= 共有知識) への情報の付加」/「背景からの情報の選択」/「情報が背景に属すか否かの判定」といった内容を弁別している。このような狭い機能ではイントネーションのもつ広範な領域をカバーすることは到底望めない。

これとは対照的に、イントネーションの役割を、より寛容に、様々な種類の意味を表出するものとする Lindsey (1985) や Vandepitte (1987) のような立場がある。例えば、Vandepitte は、イントネーションが感情的意味、(丁寧さなどの) 社会的意味、発話内の力、発話の構成に関わる意味、(新旧情報などの) 認知的意味を表すとしている。個々の抑揚型は、これらの意味をある場合には離接的に、またある場合には接合的に表出するものとみなしている。これではイントネーションが潜在的に担いうる意味を平面的に並べただけであって、その中核的機能を抽出することは不可能であろう。いずれにせよ、Bolinger 及び本論の枠組み以外の立場の可否については、稿を改めて論じなければならない。

5. 結論

本論では、関連性モダリティの視点から Bolinger の Profile 理論を総体的に検討した。まず第一に、それぞれの Profile の担う拡散された意味ないしは役割は、「R判断」ないしは「R意識の判断」の諸様式に包摂されることを実証した。第二に、Profiles の相互の関係をさらにつきつめ、基底の音調形には下降調 (Profile A に対応) と上昇調を設定し、上昇調に高上昇調 (Profile B に対応) と低上昇調 (Profile C に対応) の変種を認め、下降調および二種の上昇調が平板調の Head を産出する過程を容認し、その結果、下降調と高上昇調が中和する可能性があることを述べた。第三に、イントネーションの本質をメタファー的存在物と規定する考えは一般的にすぎ、言語ないしは言語運用に固有の規定を目指すべきことを指摘した。具体的には、Profile A が「完結性」を表し、Profile B が「未完結性」を表し、さらに Profile C が「抑制」を表すのは、その外形からメタファーを介して直接的に引き出されるのではなく、「R判断」・「R意識の判断」という語用論的プロセスを経

て導き出されるものと主張した。コミュニケーションは徹頭徹尾「関連性」にこだわるのであり、発話の実（すなわち命題内容）の面から「関連性」を達成するのはもちろんのこと、発話の形態や話者・聴者の発話への関わり方の面から「関連性」を最低限の形で保証しかつ維持するものとみなしたい。

参考文献

- Bolinger, D. (1986) *Intonation and Its Parts*, Stanford University Press, Stanford.
Bolinger, D. (1989) *Intonation and Its Uses*, Stanford University Press, Stanford.
Gussenhoven, C. (1983) *On the Grammar and Semantics of Sentence Accents*, Foris, Dordrecht.
河野武 (1992) 「多重主題構造論 (再考)」, 『大妻レビュー』 第25号, 63-76。
河野武 (1993) 「情報価の概念について」, 『大妻レビュー』 第26号, 55-71。
河野武 (1994) 「『関連性』とイントネーション」, 『大妻レビュー』 第27号, 75-89。
河野武 (1995) 「『関連性』とモダリティ」, 『大妻レビュー』 第28号, 75-85。
Ladd, D.R. (1978) *The Structure of Intonational Meaning*, Indiana University Press, Bloomington.
Lindsey, G.A. (1985) *Intonation and Interrogation: Tonal Structure and the Expression of a Pragmatic Function in English and Other Languages*, University Microfilms International, Ann Arbor, MI/London.
O'Connor, J.D. and G.F. Arnold. (1973) *Intonation of Colloquial English*, 2nd ed., Longman, London.
Pike, K.L. (1945) *The Intonation of American English*, University of Michigan Press, Ann Arbor, MI.
Sag, I. and M. Liberman. (1975) "The Intonational Disambiguation of Indirect Speech Acts," *CLS* 11, 487-97.
Sperber, D. and D. Wilson. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Basil Blackwell, Oxford.
Vandepitte, S. (1987) "A Pragmatic Function of Intonation: Tone and Cognitive Environment," *Lingua* 79, 265-97.
Ward, G. and J. Hirschberg. (1985) "Implicating Uncertainty: The Pragmatics of Fall-Rise Intonation," *Lg.* 61, 747-76.
Wilson, D. and D. Sperber. (1993) "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.